



これまでの登山・労山…そしてアルパ インクライミングのことなど No.9

ハンチントン西壁
1976年6月24日登頂
大阪府勤労者山岳連盟隊
撮影・提供・織田博志

くすのき山遊会 織田博志

何事にも始まりはあります。雪の金剛山から始まった山歩きから岩と雪、氷と氷河のアルパインクライミングを長く続けてきました。始めた頃と現在では用具や衣類、技術発展は予想をはるかに超えました。現代のフリークライミングの進歩はアルパインクライミングをより刺激のあるものに変化させています。

私の目標としたものにより近づけた山行は、海外では、インド、ガンゴドリ山群のビッグウォール、バギラティ2峰南西ピター初登攀でした。この時のチームは、酒井秀光さん、富田雅昭さんという実力派、若いパワーで眼の澄んだ好青年、24歳の馬目弘仁さんと私でした。スケール、難度もあり、取りついてから山頂まで歩くことの無いクライミングルートでした。1994年9月でした。翌年、私にとって国内

冬季初登攀最後になる笠ヶ岳二ノ沢奥壁に成功しました。ひとつの区切りとなる山行でした。

私の人生においてプライオリティの最上位に家庭がありました。その次が雪と岩の世界です。その中で憧れと情熱を持ち続けてこれた事はうれしかぎりです。年齢を考えると、激しい夢、はもう終わったのかも知れないと思いました。それでもなお、高みを目指す自分がいたことに驚いたのは他ならぬ自分自身でした。

「もう一度、本気になってクライミングをしよう。」。心底思ってしまった。私の目指すクライミングは巧いクライマーではなく「強いクライマー」でしたが「巧いクライマー」を目指して方向転換です。巧いスキーヤーにと2本

柱を立てて研鑽しようと思いましたが、決意することで実践は、私のテーマ「怒涛のごとく」できると思いました。

そのエネルギーは、瀬戸内海に浮かぶ小豆島の吉田の岩場 450 ルートに結実しました。不動沢、三倉岳にも通いトラッドクライミングにもめり込みました。

山スキーを 100%楽しむためにはと思い徹底してゲレンデ通いをしました。スピードの世界では、怖いと思ったらオバケと一緒に怖いのです。よくスピードの出しすぎで大転倒。「オダさんが死んだ」と言われました。ケガもせず「丈夫」に恵まれました。スピードの世界ではスピードに比例して衝撃は二乗になります。痛みに耐えてのスキー修行でした。現在ではハイスピードについていく「スキーヤーの身体と技術」が身についたようです。パウダースキーを楽しめる山スキーは私の「生涯スポーツ」になると思います。私にとっては雪の山に登りたいから始めた登山です。今ではスキーという翼を持ったことで雪山を大いに楽しめています。労山の仲間も始めてみませんか。

2本柱を追求しているとき、いつも何かを学んでいる時、「我々は進歩したか？私は進歩したか？」と思います。私が気

をつけていることは根底に、知識 / 技術 / 用具において現代は大きな進歩があったが、精神面において画期的な進歩があったとは思えないからです。知識偏重、技術至上主義に陥ってはいないか。フィジカルのみ拘泥し心の問題に背を向けていないか。

自己に対する過大評価と他の人に対する過少評価をしていないか。と自分自身に問うことにより「登山の世界」を拓けていきたいと思えます。思いや心は目に見えません。しかし、そこから生まれる「思いやり」や「心遣い」に感謝し「楽しく充実した山行」を「山と仲間」で続けていきたいと思えます。